大賞

旅日記　北海道編

豊川　遼馬

考古学を始めて早四年。

ぼくは中二であるから「もう四年」と言えるが、考古学からみると「まだ四年」である。

周りがテニスだ、サッカーだと、爽やかに部活に励み友情や根性を深めていくなか、ぼくはひたすら竪穴住居を研究する。非常に地味で孤独だ。

しかし、地味には地味なりの楽しさがある。

石の上にも三年。この三年を過ぎた去年から活動の幅がグッと広がった。

中学生になり、今までより遠出が出来る様になったからだ。大人料金になった財布への打撃と引き換えに一人旅を手に入れた。

旅と言っても目的は考古学。しかも中学生。予算はあまりない。あるのは時間と体力だけだ。あとは自分の頭と足。これで十分だ！

中一での旅先であった東北を更に北上し、北海道へ向かうことにした。

第一章　目指せ北海道

北海道は広い。移動が鍵となる。地図で見ると気軽に移動できる気がするが、実際は違う。広いだけでなく、電車の本数も少ない。もし、北海道の端々を行こうとしたら、二日以上かかってしまう。ぼくは、ポイントを絞り道南と札幌を回ることにした。

使う切符は「東日本・北海道フリーパス」。一万円で七日間ＪＲの普通電車と快速が乗り放題になるというお得なものだ。

こんな計画を立てた。

初日に祖父がいる青森県の八戸で一泊。二日目の始発で函館へと向かい博物館を見学する。その晩の十一時頃、函館駅から夜行急行「はまなす」に乗ると翌朝六時に札幌に到着。

札幌では、駅近くの遺跡や博物館を数か所巡り、その晩苫小牧発のフェリーに乗り八戸へ帰るというものだ。

計画は完璧だった。なぜなら、ぼくの考古学の師匠である学校の教育博物館の菅野先生に相談し何度もアドバイスをもらっていたからだ。彼はプロだ。

問題は親だった。反対された。

「北海道!?しかも、そんな夜遅くに知らない駅に子供一人でいるなんて!」

この関門を突破しないと、全てが台無しだ。

どこへ相談すればいいのだ・・・

考えに考えた。いつになく考えた。

ひらめいた!北海道の警察だ。もしここでダメと言われたら成長するまで待つしかない。「あの、相談がありまして。考古学の研究で北海道を一人で回りたいのですが・・・中学生ですが、夜遅く駅で電車を待っていてもいいでしょうか?」

「大丈夫ですよ。まぁ、ホームレスやスリにさえ気を付ければ・・・でも、念のためJR北海道にも聞いたらいいと思いますよ。」

目の前がパッと明るくなった。警察が良いというなら親を説得できる気がしてきた。

よし、次はJRだ。

「えぇ、問題ないですよ。」

警察とJRの回答とぼくの普段見せることのない熱意でどうにか親を説得できた。関門突破!

波に乗ったぼくは、更に分刻みのスケジュールをたてた。このままいくと西村京太郎なみのトリックさえ思いつきそうな勢だ。四日後の出発に備え着々と準備は進んだ。

ところが、大変なことが起こった。

「函館札幌間、不通。復旧の見通し立たず」耳を疑った。メインで使う予定の函館本線の線路が流されたの

だ。原因は、北海道に降った記録的な大雨だった。
自然災害は不可抗力というのはわかる。わかるけどなぜ今・・・。繰り返されるニュースを聞く度に悲しくなった。
もしかしてと、一％の望みにかけてＪＲ北海道に電話をかけた。
「今のところ復旧する見通しはありません」線路と共に計画は流れた。
でもぼくは諦めなかった。他に方法があるはずだ。西村京太郎もこうやって抜け道を探しながらトリックを作っているに違いない。
そうだ！フェリーを使おう。当初、帰りに使うはずだったフェリーを行きにも使うことを思いついた。しかし、この計画では滞在時間が短く、半日がいいところだ。行けないよりはいいがじっくり見る事が出来ない。
見たい、見たい。宿泊さえできれば・・・
ぼくは一生懸命宿泊の方法を考えた。このご時世、中学生一人泊めてくれる宿なんてそうそうない。それでも諦められず、探し続けた。
助け舟は意外なところからやってきた。最初の関門だったあの母だ。
「ユースホステルなら大丈夫かも。」
ユースホステル・・・外国のバックパッカーが頭をよぎった。早速調べると日本にもあるではないか。しかも札幌は二件もある。
ホームページにも旅する青少年を応援する様な言葉が並んでいる。ぼくにピッタリだ。
ドキドキしながら札幌のユースホステルに電話した。
「ぼくは中学生で・・・。」
函館警察署やＪＲ北海道の時と同じように説明をした。
「問題ないですよ。証明書さえ持ってくればね。今、予約しますか？」
話がスイスイ進んでいく。ドキドキがワクワクに変わった。
思えば、親の反対、線路が流されるなど次々と壁が現

れたが、どうにかこうにか乗り越えられた。やるじゃないか、ぼく！

越えてみると壁があったこともよかったとさえ思える。

宿泊を含めもう一度最終計画を立て直した。菅野先生に新計画のお墨付きをもらったのは何と、出発の前日。慌ただしい。

いよいよ明日から旅が始まる。

第二章　グングン進む

午前六時、旅の朝は早い。いよいよぼくの地元、川崎を出発だ。

見送りの母と別れると気分が一気に盛り上がった。何て言ったって一人旅だ。どうも笑いが止まらないが腹に力を入れてぐっとこらえる。上野に向かう電車はサラリーマンでいっぱいだ。朝からどことなく疲れた顔をしている。品川、東京、ビルをくぐり抜ける度にサラリーマンは消えていく。上野でぼくは電車を降りた。乗り換えだ。

ここからひらすら乗り換えが続く。その数なんと十回。電車好きにしか喜べない回数だ。電車好きでよかった。しかも普通電車なので一つ一つ丁寧に駅を止まっていく。止まった駅はゆうに百を超す。

黒磯をこえると田んぼ、畑、山、トンネルの繰り返しだ。乗客はどこかのんびりしている。東北の方言らしきものも聞こえ心地よい。

主要駅に近くなると突然思い出したようにビルが現れる。オッと思う頃にはまた、また田んぼに戻っている。

家を出てから八時間後の午後二時、ようやく中間地点の仙台に着いた。仙台は思い出の地だ。なぜなら一年前の夏、考古学の旅で訪れたからだ。奥松島の地震の傷跡を思い出し悲しくなった。

仙台を去り地味に乗り換えを繰り返し、若干疲れてウトウトしていると風鈴の音で目を覚ました。

平泉の駅だ。天井一面に風鈴がつるされていた。数々

の風鈴が思い思いに風に揺られて鳴っている。よく見ると風鈴に何かがぶら下がっている。願い事だ。地震からの復興への気持ちが込められていた。一斉に響く風鈴の音は頼もしくもあり、切なくもあった。

新幹線や飛行機ならひとっとび。色々なことを思い出したり気付かなかったかもしれない。普通電車でよかった。

福島、宮城、岩手と東北を順に走り抜き、いよいよ青森まで来た。八戸で降り八戸港から出港だ。

しかし、その前に八戸の祖父の家に寄った。

祖父、叔父にあいさつをし、再会を喜びあう。滞在時間わずか三十分。まさに分刻みのスケジュールだ。タクシーに乗り込み八戸港を目指した。普段ならもう就寝の時間だ。

意外にも八戸港は混んでおり手続きに時間がかかった。トラックの運転手など仕事関連が多い。時々家族連れらしき人もいた。

乗船するとまっすぐ二等船室へむかった。教室ほどの空間に仕切りのマットが一人一枚ずつ敷かれて個人用ロッカーもある。まるで合宿所だ。同室の人達は自衛隊の団体だった。ますます合宿ぽいがいざとなった時は安心だ。

風呂に入った。贅沢にも風呂から太平洋と下北半島が一望できる。長い一日だった。そして、いよいよ、明日の朝には北海道だ！

今夜僕は、太平洋の上で眠るのだ！

第三章　苫小牧から室蘭へ

到着予告で目が覚めた。カーテンを開けると港が広がっていた。ここは苫小牧港だ。

いよいよこれから始まるというワクワクした気持ちと、本当に一人で回れるのかという不安な気持ちが入り混じっていた。

待ちに待った考古学の旅。しかし、いざとなったら頼る人がいない。北海道はやはり遠い場所だとひしひしと

感じた。

早朝のバスに乗り苫小牧駅へ向かった。慌ただしく室蘭本線に飛び乗り東室蘭を目指す。

今日の目的地は北黄金貝塚だ。移動が不便であるが、ここは絶対に外せない。

三両編成のディーゼルカーは、学生が多く朝のにぎわいでいっぱいだ。このにぎやかさは、ぼくの通学と変わらない気もするが、どこかのんびりして田舎らしさが漂う。

登別付近で学生がいなくなると急に静かになった。横をむくと海が広がっている。反対側は北の大地だ。どちらも広大だ。延々と走り続けた後で乗り換えだ。

その乗り換えがまた大変だ。何しろ、電車は、多い時で一時間に一本。駅付近に時間を潰す場所がないのでひたすら駅の様子をカメラにおさめた。それでもなお時間があまりホームをウロウロしたりベンチで横になった。本州と北海道では時間の流れる速度が違うのではないかと真剣に思うほど時間はゆっくりと過ぎてゆく。

待ちに待った接続の電車は一両だ。中に入りなるほどと思った。人はほとんど乗っておらず一両で十分だ。

雄大な自然を走りぬけ爽快だった。駅と駅が離れているせいかこの一両の電車は予想以上に早かった。

最高の気分で北黄金貝塚の最寄り駅である黄金に着いた。無人の小さな駅舎であった。この地にその昔縄文人が住んでいたと思うと不思議な気がした。

地図を確認し、駅をあとにした。ひたすらまっすぐ進めばよい。非常にわかりやすい。

ひたすらひたすらまっすぐまっすぐ、山と海に囲まれて歩き続けていく。川崎では気温が三五度近い日が続いていたがここは涼しい。気持ちよく歩き続けた。

これだけ自然豊かな土地だから縄文人もここを選んで暮らしたのだろう。ぼくが縄文人であっても住んでみたいと思える場所だ。しかし平成人としては・・・。不便そうだ。

歩くこと四〇分。ついに博物館に到着だ。ここが、ぼくが目指した最初の目的地である北黄金貝塚の博物館

だ。

やった！やった！

声に出さなかったが心の中でガッツポーズをした。思えば長い道のりだった。

小さめの博物館の横に丘が広がっている。ぼくはピンときた。これが北黄金貝塚だ！

四〇分歩いたことも背中の重い荷物のことも忘れ早足でまずは、博物館に向かった。

第四章　北黄金で

「やっぱり。」

博物館に足を踏み入れ思った。受付に誰もいないのだ。この手の小さな博物館にはありがちなことで驚きはしなかった。

駅と違い無人ということはないだろうからそのうち職員の人が現れるに違いない。

入り口付近のパネルを見ているとエプロンを着けたおじいさんがぼくに近づいてきた。

職員の人だろうか。

「こんにちは、一人？大学生？」

と話しかけてきた。簡単に答えている間にこのおじいさんが、博物館のボランティアであることがわかった。

考古学の旅をしている事と、神奈川から来た事を告げると、おじいさんは身を乗り出してきた。そして、説明をしてくれた。

どうやらつきっきりでガイドをしてくれるらしい。一つ一つ丁寧に説明してくれるので展示物以上の事がわかった。貝塚の事はもちろんだが縄文人の心にも触れることが出来た。もっともこのおじいさんも縄文人ではないのだから本当のことはわからないが・・・。

しかし、真剣に話す姿から相当の縄文好きとみた。仲間だ！

おじいさんにもぼくの縄文好きが伝わり仲間だと思ってくれたのか突然ジュースをご馳走してくれた。博物館の売り物のジュースだ。

同じジュースを飲みますます仲間意識が高まったところで丘へ向かった。

途中、縄文時代の森を再現したその名もズバリ「縄文の森」を通り抜けた。わかりやすいネーミングで、とてもよい。

湧き出た泉を飲みにリスがやってきた。さすが縄文の森だ。ぼくが感心しているとおじいさんは、さりげなく言った。

「キツネやエゾシカやたまに熊も来るよ。」

たまに熊・・・縄文時代なら大歓迎だろうが、今日は来ませんようにと願った。

貝塚は丘の頂上だった。眺めも最高だ。ご存じの通り貝塚は今でいうゴミ箱だ。

こんな最高の場所にある貝塚をぼくは初めて見た。今まで見た貝塚は集落内に作られていることが多かった。動線を考えてもそれが一番効率的だ。

なぜ丘の頂上に？

その答えをおじいさんは教えてくれた。とても長い説明をしてくれた。まとめてみるとこういうことらしい。

『ここの貝塚はただのゴミ捨て場ではない』

『無駄なく利用した動物や道具を自然に返す大切なところ』

『だから空に一番近く眺めがよい丘の上を選んで貝塚が作られた』

『その考えは、アイヌの熊送りの儀式にも、つながっている』

奥が深かった。同時に北黄金に住んでいた縄文人は、素敵な考えを持っていたのだと思った。

使った物やいただいた命を自然に返す。そこには、感謝の気持ちがこもっているに違いない。

空に一番近い場所・・・命は空から来て空に返っていくものなのだろうか。

話を聞いていたらこの場所が神聖な場所に思えてきた。また、その気持ちは大切に後世に伝えていかなければいけないと思った。北黄金貝塚は、ゴミ捨て場ではなく、命への感謝の場所なのだ。本当に来てよかった。

貝塚を見終わると特別に普段は見れない倉庫を案内してもらった。ハマグリやカキの貝がらや石器などの出土品が並んでいる。展示室とは違い数々の品が無造作に置かれている。貴重な経験である。その上、おじいさんは、ぼくに更なるサプライズを与えてくれた。

エゾシカの角をくれたのだ。さすがに縄文時代の物ではないというが嬉しかった。おまけに、この土地特有の石器のペンダントまでもくれた。

初めて会ったとおりがかりのぼくにこんなに親切にしてくれるなんて。ありがたかった。

この土地では貝塚に象徴されるようにきれいな心が根付いているのかもしれない。

駅まで車で送ってもらうことになった。都会では、考えられない。もし、声をかけられたとしても絶対に断る。

ありがとうございます、お願いしますと、言えたのは、北黄金の縄文時代から受けつがれた心をおじいさんに感じたからだという気がする。

駅のホームに入ったぼくにおじいさんは手を振ってくれた。ぼくも、親せきと別れる時の様に何回も手を振って別れた。

車で送ってもらうことで頭がいっぱいで電車の時間を見ていなかった。そのため、東室蘭で三時間待ちとなった。でも、それすら笑い飛ばせた。

大らかな気持ちになれた北黄金貝塚見学だった。

第五章　札幌の夜

さて、ぼくは今、苫小牧に向かっている。朝の出発地点と同じ場所だ。

目指すは札幌であるのになぜ戻る？と思われるかもしれないが路線の関係である。真っ直ぐ札幌へ行けないのだ。北海道は広い。来た道を延々と走り続けた。すでに夕方だ。

ようやく苫小牧に着くと少しほっとした。今朝来ただけだが、一度は通ったという安心感がある。しかし、こ

こでゆっくりしていられない。札幌へ行くのだ。

札幌を目指す電車は混んでいた。車両も増え三両編成だ。札幌は都会なのだろう。

夕日がおちる頃、札幌へ到着した。まるで上野のようだ。電車のホームは、人も多く駅は賑わっていた。やはり都会だ。

ユースホステルにたどり着けば今日の計画が無事終了する。しかし、駅を抜けられない。駅を抜けるとユースホステルのはずなのだが。広いのだ。目印しの駅ビルと思っても駅ビルが何件も建っている。東急、大丸・・・駅ビル巡りのようになってしまい迷った。ぼくは、とりあえず改札口に戻った。

迷った時はその場を動かないか元の場所に戻るに限る。戻ったとこでもう一度進んでも迷うだけなので観光案内所で聞くことにした。なんだ、すぐそこじゃないか。

あっという間に札幌ハウスユースホステルにたどり着いた。このホステルのおかげで中学生のぼくでも一人で宿泊できるのだ。張り切ってチェックインを済ませ部屋に入った。

相部屋と聞いていたが人はいなかった。二段ベッドが四台。八人部屋のようだ。よく見ると先客のリュックが置いてある。旅行というよりは合宿を連想させる。

夕飯は、コンビニの弁当にした。わびしいと思われるかもしれないが、普段食べないので結構ワクワクだ。迷いに迷って選び抜いた唐揚げ弁当とコロッケを食堂で食べた。親切にもフロントの人がお茶を淹れてくれた。人が淹れてくれたお茶はおいしい。

部屋に戻るとリュックの持ち主がいた。見知らぬ人だが部屋を共にする仲間だ！

実はぼくは、相部屋を楽しみにしていた。予約前、ぼくの家族は相部屋なんて落ち着かないと言っていたがぼくはそう思わなかった。

旅は出会いだ！ぼくたちはまずあいさつをした。片言の日本語を話す外国人だ。

間もなく日本語より英語で話した方が会話がわかりや

すいということでまとまり英語に切りかわった。
彼は、アメリカ出身で日本に来て一年たっていない。今は釧路の高校で英語の教師をしているそうだ。休みを利用して北海道を一周するというかなりハードな計画を教えてくれた。ぼくも自分の話をし何となく打ち解けたところで彼は食事へ行きぼくは風呂へ向かった。風呂はやはり合宿所の様な大浴場だ。
「川崎を出てから二日たったのだ」と今までのことを思い出しながら湯につかった。
部屋に戻るともう一人仲間が増えていた。ちょっとワイルドなチョイ悪風なおじさんだ。大友康平という中年歌手にとても似ている。
ぼくらはあいさつと自己紹介をした。このチョイ悪風なおじさんは関西からバイクで北海道へやって来たという。途中野宿までしたというのだから見た目通りなかなかワイルドだ。明日、長万部にでも行ってみようかというのだが、よくよく話を聞くと細かい計画はたてていないらしい。ぼくの分刻みの計画表とは正反対だ。北海道だけを目指してやってきたらしい。あとは気のむくまま、風の吹くまま・・・。さすがチョイ悪風だ。
しかし、とても優しいおじさんで話もおもしろかった。外国人も戻り三人で話をした。今晩はこの三人で一部屋使うことになる。
おしゃべりがひとしきりすんだところで明日の朝六時に出発しなければならない外国人はベッドに入りあっという間に寝た。
そのあともチョイ悪風のおじさんとぼくは話をしたり本を読んだりしながらのんびり過ごした。元からの知り合いの様だ。
消灯時間を互いに決めそれまではそれぞれゆっくり過ごした。いよいよ消灯時間だ。ベッドは心地よかった。
昨晩はフェリーの中だったなぁ・・・
久しぶりに布団に入った気がする・・・
ぼくは今北海道にいるのか・・・
中学生と外国人と関西人、不思議な組み合わせだな・・・

そんなことを考えているうちにいつの間にか眠りに落ちた。

札幌の夜が更けてゆく。

第六章　札幌巡り

人の気配で目が覚めた。そうだ、ここは相部屋なのだ。

外国人が荷物をまとめ出発の準備をしていた。もう出発の時間という。時計を見ると六時ピッタリだ。チョイ悪風のおじさんも起き出し二人で外国人を見送った。

チョイ悪風のおじさんは朝食へ向かいぼくは朝風呂へ向かった。朝風呂なんてぜいたくだ。ぼくも旅慣れてきたのだろう。

おじさんとぼくは部屋で話をした。色々な話をした。昨日初めて会ったなんて気がしない。おじさんはぼくにおすすめの本を教えてくれた。それは、砂漠で遭難死するというやはりワイルドな本だった。

ぼくたちは同じタイミングでホステルをあとにした。お互いに「じゃあ」と手を振りそれぞれ出発した。おじさんはバイクでさっそうと消えて行った。よし、今日は忙しいぞ！

まずは札幌市埋蔵文化財センターへむかった。やはり、札幌の駅は広い。一日経ってもなれず、表示を見ながらなんとか地下鉄のさっぽろ駅に到着した。

地下鉄に乗ったと安心する間もなく乗り換えだ。今度は市電である。市電は実に気持ちがよい。すすきのの大通りのどまんなかを通り抜け市街地を走ってゆく。北海道の大きな通りは気持ちのよいぐらいまっすぐだ。川崎に市電を通したとしてもこんなに気持ちよくはないだろう。

中央図書館前という駅で降りると目の前に大きな図書館があった。この中に埋蔵文化財センターがあるのだろう。

埋蔵文化財センターは、全国にあり、ぼくもいくつか歩き回っているのだが博物館にしては小さいことが

多い。普通の人にはつまらない場所の様だ。しかし、考古学好きにとってはお宝の山であり素晴らしい場所だ。札幌市埋蔵文化財センターもぼくの期待を裏切らなかった。古代の札幌の人々の暮らしが再現されていた。貴重な情報を集め次の目的地にむかった。

本日のメインだ。北海道立開拓記念館である。移動のためもう一度札幌駅へ戻る。今度は迷わずに乗り換え森林公園駅に着いた。

バスへ乗り継ぐのだがこのバスの本数が少ないためバスの時間にあわせ計画を立てていた。乗り遅れると大変だ。

ぼくのスケジュールとはうらはらに遅れたのはバスだった。十数分遅れた。乗り遅れないため十五分位前から待機していたので三十分ちかく待ったことになる。普段のぼくならこんな行動はしない。ぎりぎりで十分だ。

開拓記念館は先ほどの埋蔵文化財センターと大違いだ。建物も立派で広い。気合が入った記念館である。しかし、人はほとんどいなかった。地元の人も観光客もあえてわざわざ来るような場所ではないのかもしれない。

ガイドブックや観光案内でもっと紹介してほしい。ここに来ると北海道の歴史と文化が一目で分かる。

北海道の動物やアイヌの人々の暮らし、明治時代の開拓・・・。幅広くしることができる。ぼくのテーマの竪穴住居の構造も興味深かった。アイヌの文化が柱の組み方にでていたりもした。本州の住居に比べて、竪穴を深く掘る遺跡も多い。深いところで三メートルも掘るそうだ。ぼくが予想するには雪や寒さ対策だろう。

いくら時間があっても足りないぐらいだ。

しかし、ぼくは行かなければならない。バスに乗り遅れたらこの先大変なことになる。

無事バスに乗り、もう一度札幌駅に戻った。

札幌駅にも帰れ、よゆうぶっていると雨が降ってきた。レインコートは持っていたが役に立たないほどの大雨だ。体も冷え切りあわてて近くのカフェに飛び込んだ。サンマルクだ。川崎と同じメニューでホッとした。ついでにお昼をすませ雨が止んだところで次の目的地へ

むかった。

いよいよ札幌最後の北海道大学北方民族博物館である。実は、ユースホステルの目の前が北海道大学の敷地となっていたのだが、とにかく広いらしい。クラーク博士のあの有名な胸像も近くにあったようだがおめにかかれなかったほどだ。気持ちは「少年よ大志を抱け」だ。

同じ北海道大学でも目的の博物館は更に別の敷地にある。今度は小雨が降ってきた中をてくてくと歩いた。

博物館は小さいが見応えはあった。アイヌの服やアクセサリーがたくさん展示されている。同じ日本だが服一つにしても全く違う。独特の模様や色遣いは外国のようだ。どこの国だろう・・・似ている文化を思い浮かべても浮かばない。アイヌはアイヌで一つの文化だ。先ほどの博物館の竪穴住居にもアイヌの特徴があったことを思い出した。旅の一つ一つがパズルの様につながっていく。

前日の北黄金貝塚の天に返すという文化もアイヌの流れをもっていると教えてもらったなぁ・・・色々なことがつながっていく。

昨年は東北の考古学の旅を思い出したり春に行った九州のことも思い出したりした。確か九州は朝鮮の影響を受けていた。

今ぼくが一人で北海道にいることも不思議だが、遠い縄文時代の同じ時に栄えた文化は似ているようでこれだけ違うことに気付き、驚いた。

こうして博物館巡りは終了した。あとは無事に帰ることができれば今回の旅は大成功！

第七章　さようなら北海道

いよいよ札幌をあとにする時がやってきた。

短い間に色々なことがあった気がする。名残惜しい気持ちもあったがそれは次への意欲ともなる。もう一度札幌に来よう。更に札幌を起点に北上してみよう。

重いリュックを背負い千歳線に乗り込んだ。あとは一路苫小牧を目指すだけだ。一時間と少しで着くはずだ。

ぼんやりと北海道の景色を眺めフェリーのことを考えていると突然アナウンスが流れた。

困ったことになった。

大雨でこの電車は二つ先までしか行かない。

苫小牧方面へ向かう人は次の南千歳駅で降り駅の人の指示にしたがう様に言っている。

代行バスでもでるのか?とにかく苫小牧へ行き今夜のフェリーに乗らなくてはならない。おとなしく南千歳で降り駅員の指示に従うことにした。

「苫小牧・室蘭・長万部へお越しのお客様はお手持ちの切符で次に来る特急に乗って下さい。南千歳で安全確認をするため一時間半ほど停車します。」

色々なことが頭をよぎった。

特急に乗れるのか。これはラッキーだ。

・・・そんなのん気なこと言ってる場合ではない。

フェリーに間に合うのか!?

考えてもどうしようもない。ドキドキしながらおとなしく再開するのを待った。

特急にのりこんだはいいが一時間半待ちである。出航時刻には間に合うが手続きに間に合うのか?もし一時間半で復旧しなければ?

しかもこの特急はぼくたちが臨時で乗っているため席がない。

電車が再開した。心底ホッとした。でも、安心するのはまだ早い。次はフェリーだ。

苫小牧の駅に着くとフェリーターミナルへ向かうバス乗り場へ急いだ。

なんてことだ!最終のバスはもう出発してしまった。

タクシーしかない。タクシー乗り場へまわり真っ先に聞いた。

「フェリーターミナルまでいくらですか?」

ぼくの今の所持金は五千円だ。

「千五百円以内ですね。」

よかった!時間も少し余裕がある。フェリーターミナルでお土産を買うことを考えるほど気持ちに余裕が出た。気持ちだけでなくお金に余裕を持たせようとコンビ

ニのATMでお土産代をおろすことにした。
運転手は気持ちよくコンビニで待っていてくれた。しかし、最後の最後までハプニングが起こるのが旅である。
なんとコンビニにはATMがなかったのだ。
そのままフェリーターミナルへむかった。帰れれば良いのだ！ターミナルへ着くと学割の乗船券を買った。タクシー代と乗船券代を払うとぼくの残金は百円をきっていた。
予算をたてたのもぼくだ。実に計画通りではないか！二キロ先の銀行に行くこともできるとあとから教えてもらったが、ぼくは軽い財布のまま乗船した。
夕飯は食べられなかったがすがすがしい気持ちでいっぱいだ。いざとなったらリュックの中のお菓子とお茶がある。
明日の朝には祖父のいる八戸だ。何も心配はいらない。
ぼくは張り切って二等室へむかった。おとといと同じ様に仕切りのマットがある。ぼくは慣れた手つきで荷物をロッカーにしまうと風呂に向かった。
風呂から見える太平洋は真っ暗だが広いということは分かる。しかし今夜のぼくは太平洋より大きな思い出を持っている。
風呂から上がり、マットの上に寝っころがった。今夜もぼくは太平洋の上で眠るのだ！

おわりに

秋になりに日常が戻ってきた。
友達は相変わらず、サッカーだ、テニスだと爽やかに部活に励んでいる。
そして、ぼくもまた、考古学を続けている。やはり地味で孤独だ。
今は、北海道のレポートをコツコツ作り続けている。作っても作っても終わらない。それほど書きたいことでいっぱいなのだ。

終わらないくせに、次の考古学の旅はどうしよう、なんてことは次々浮かんでくる。

北海道もまだまだ調べたい。でも、北を見たら次は南が見たい！目指せ九州だ。

・・・北海道北日本フリーパスが使えない。

いや、きっと何か方法があるはずだ。

何ていったって、時間と体力と頭と足がある。

ぼくの考古学の旅は、これからだ！